

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラスカ・イヌピアット社会における気候変動と石油開発の影響：特集 北方民族と環境 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4848

▼特集 北方民族と環境①

アラスカ・イヌピアット社会における気候変動と石油開発の影響

各地で進められる開発や地球温暖化……。北方地域における環境変化の現状と、北方諸民族に対する影響、それに対応する人びとの姿を紹介します。

岸上きしがみ 伸啓のぶひろ 国立民族学博物館・教授

はじめに

地球の温暖化は、現在、人類が直面する深刻な問題のひとつである。そしてその影響が顕著にあらわれるのは、長年にわたって蓄積されてきた雪氷が融ける北極と南極である。極地の氷山から融けだした冷たい水は、海に流れ込み、海水面を上昇させるだけでなく、海流の流れにも影響を及ぼし、巡り巡ってエルニーニョ現象など世界各地で異常気候を頻発させている。

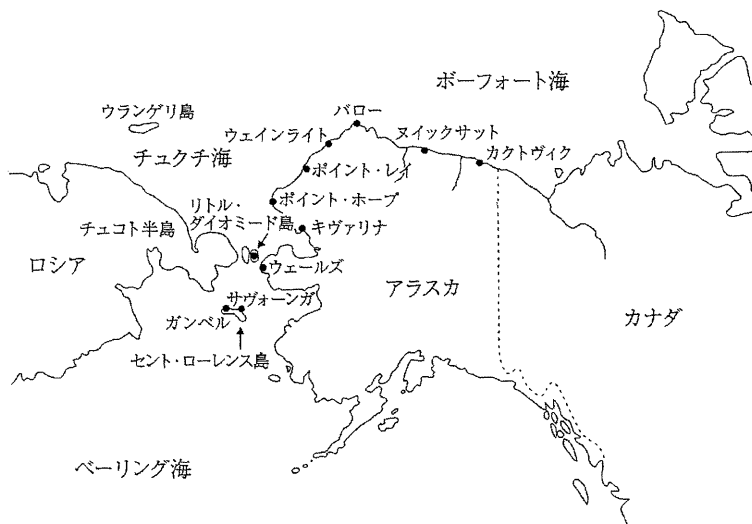
ここでは、アラスカ地域における気候変動について簡単に説明した後、アラスカ北西地域の沿岸部に住む先住民イヌピアットの生活を事例として、気候変動が及ぼした諸影響を紹介したい。

アラスカ地域における気候変動

アラスカ地域では冬の気温がこの五〇年間に三〜四℃上昇し、北極海では、こ

の三〇年間に一〇〇万平方キロメートル以上の海水がなくなったという。これらの変化は、極北地域に生息するホッキョクグマやアザラシ類、極北地域で夏をすごす渡り鳥、ツンドラ地帯に分布するカリブーに大きな影響をおよぼしている。ホッキョクグマやアザラシ類は春の海氷上をおもな餌場と出産、子育ての場所としているため、その範囲の減少や消失は生活環境の悪化を意味する。また、季節の変化は渡り鳥の繁殖や営巣活動に多大な影響を与える。さらに冬に雨やみぞれが降り、それが氷結したためにその下にあるコケなどをカリブーが食べることができず、痩せたり、餓死したりする個体が発見されている。

極北地域における温暖化は、そこに住む先住民の生活に影響をおよぼす。温暖化によって雪氷が海上やツンドラ上を覆う期間が短くなり、狩猟漁労のためにスノーモービルを利用できる期間が短くなってきている。また、沿岸の浸食や永久凍土の融解は、家屋の倒壊やコミュニティの移転の原因となっている。食料資源となる動植物の減少や劣化は、人々の栄養状態に影響を与えるのみならず、食物分配の頻度を低減させ社会関係にも悪い影響をおよぼすことになる。さらに、これまで海水が広がっていた北極海にお



アラスカの捕鯨村の地図

いて、地球温暖化のために夏季に結氷しない海域が広がり、北西航路に沿った大型船舶の航行や海底資源の開発が以前と比べ容易になった。このような状況の変化により、極北先住民の生活にさまざまな影響が出はじめている。

イヌピアットの捕鯨と気候変動

アラスカのノース・スロープには、イヌピアットと呼ばれる先住民が住んでいる。その中で沿岸地域の村で暮らしている人びとは、現在でもホツキョククジラ



写真1 ウミアックの船体のカバーを縫う作業(2010年3月撮影)

(以下、クジラ)を捕獲している。ここでは、筆者の調査地であるパローを事例とする。なお、パローは人口規模が小さいのでここでは村と呼ぶことをお断りしておく。

パローはチュクチ海に面した北緯七一度、西経一五六度にある人口、約四四〇〇人(うちイヌピアットは二六〇〇人)のコミュニティである。パローはノース・スロープ郡の中心地であるため、合衆国政府やアラスカ州政府、郡の政府関連機関、病院、学校、企業、先住民団体の事務所、商店等が所在している。現在では、イヌピアットはさまざまな賃金労働に従事しているが、彼らの最大の関心事は、春季と秋季のクジラ猟である。

パローには、クジラ猟を行う「クルー」と呼ばれるグループが五五ほど存在している。各クルーの中心は、ボート・キャプテン(以下、キャプテン)とその妻である。さらに七く二〇人の乗組員が各クルーに所属している。クルーの成員とその家族は、クジラ猟やそれに関連する祭りを実施する重要な社会単位である。

毎年、二月になると春季に出猟を予定しているグループは、ウミアック(大型皮張りボート)の船体を新調するか、補修をする。あらたに作る場合には、村の縫い手八く一〇人が丸一日をかけてアゴ

ヒゲアザラシの皮五、六枚を縫い合わせて船体のカバーを作る。ウミアックの準備が整うと、三月ごろには捕獲したクジラの肉や脂皮(マタック)を保存する地下貯蔵庫(二辺二メートルほどの立方体をしたツンドラを掘った地下貯蔵穴でアイス・セラーと呼ばれる)を掃除し、残っていた肉や脂皮を取り出し、欲しい村人に分け与える。

三月下旬から四月上旬にかけて村から捕鯨キャンプを設営する開水域(リード)の近くの海氷原上にウミアックや装備を輸送するための小道を複数のグループが



写真2 地下貯蔵庫の掃除(2010年3月撮影)

協力していくつか作る。四月上旬ごろになると開水域に面した海水原際にそつて、約二五のグループが二〇メートルほどの間隔をあけてキャンプを設営し、クジラが回遊してくるのを見張る。ホックヨククジラは成獣では、体長が約一五〜一八メートルに、体重が約六〇〜八〇トンになる。パローのハンターたちが狙うのは、肉や脂皮が柔らかい体長が一〇メートルぐらいの若いクジラである。

クジラは呼吸をするために時々、その巨体を海面に現す。適当な大きさのクジラを近くで見つけると、ウミアックに乗って權をこいで追跡する。

クジラが至近距離に入るとハンターはウミアックの上から鉾こきを打ち込み、その後で、シオルダー・ガンでとどめを刺す。仕留めるとウミアックに乗ったハンターたちは、神（キリスト教）に感謝をささげる。それから尾ひれの部分にロープを結び付けて二隻以上の動力エンジン付きの金属製ボートでキャンプ地の近くに曳航する。

クジラを海水原上に引き上げると解体作業が始まる。この作業には他のグループのメンバーも三々五々にやってきて手伝う。四、五人が解体作業に従事し、二人ぐらいが解体された部位を決められた場所へと運ぶ作業を行う。この解体場

には、キャプテンの妻や乗組員の妻たちがやってきて、脂皮を煮て、飲み物とともに作業に従事している人や集まってきた人びとに振舞う。通常、解体には四〜五時間ぐらいかかる。解体が終わると、クジラの頭部の骨は、海水原上から海へと戻される。頭部にはクジラの靈魂が宿っており、海に戻すと、再生すると信じられてゐるからだ。

解体作業が終わると、クジラの解体や曳航を助けたグループや個人に特定のやり方で肉などを分配する。翌日の宴会用の肉や脂皮はキャプテン宅に持ち帰られ、料理される。一方、それ以外の肉や脂皮などはすべてキャプテンの地下貯蔵庫で保管する。

捕鯨に成功したキャプテンの自宅の屋根の上には、彼のグループの旗が立てられる。クジラの捕獲に成功したハンターとその妻たちは、キャプテンの自宅に集まり、祝宴の準備をする。彼らは、肉と脂皮、舌、内臓を適切な大きさに切つてから煮る。準備が整うと、キャプテンは祝宴を開き、やってきた村人にピニール袋に入った肉や脂皮など手渡す。一方、村の古老たちはキャプテン宅の居間でクジラの肉や脂皮などを楽しんで後、お土産に肉などをもらつてかえる。

通常、五月中旬に春季のクジラ猟が終

了するが、このあとにアプガウテイ祭やナルカタック祭が開催される。捕鯨に成功したキャプテンは、ウミアックにグループの旗を立て、村に面する海岸の近くの海水原上に設置する。これはアプガウテイ祭のためである。「アプガウテイ」とは、捕鯨に成功したウミアックを陸揚げする祭りである。捕鯨のグループ単位で準備され、通常、五月下旬から六月の上旬に開催される。この祭りでは、村人を海岸に招き、祝宴を開催する。このときには、クジラの肉や脂皮、内臓に加え、カモやガンのスープやミキガックと呼ばれるクジラの発酵肉が来客に振舞われる。だれでもこの祭りに参加することができる。

六月中旬から末にかけては、ナルカタック祭が村の一面で実施される。春の捕鯨に成功したキャプテンと彼のグループが、村人を招き、一日の祝宴を開催する。一つのグループが単独で開催することもあれば、複数のグループが共同して開催する場合もある。クジラの肉や脂皮、内臓、ミキガックの食事を振舞う以外に、ブランケット・トス（縫い合わせたアザラシ皮を利用したトランポリンのような遊び）やイスピアット・ダンスが行われる。これは多数の村人が参加する重要な捕鯨に関連する祭りである。



写真3 開水海域を見張るハンター（2010年5月撮影）



写真4 クジラをウミアックで追跡する（2010年5月撮影）



写真5 クジラの解体作業（2010年5月撮影）



写真6 捕鯨後のキャプテン宅での祝宴（2010年5月撮影）



写真7 アプガウティ祭の様子（2009年6月撮影）

七月から九月にかけては、秋季の捕鯨の準備を行うとともに、ウミアックの船体を張り替えるために必要なアゴヒゲアザラシの皮を確保する目的で海獣狩猟が行われる。

雪が地面に積り始める九月下旬から一〇月上旬になると夏をポーフォート海ですごしたクジラが、ベーリング海に向けて移動を開始し、バローの沖合を通過する。バローでは、数キロメートルから三

〇キロメートルほどの沖合で動力エンジン付き大型金属製ボートを利用して捕鯨が行われる。秋季の捕鯨は、朝に村を出て、夜には村に帰る日帰り猟である。毎年、三〇以上のグループが出猟する。捕鯨に成功すれば、クジラを村の近郊にある解体場まで曳航し、春猟と同じやり方で解体、分配した後で貯蔵する。捕獲に成功したキャプテン宅では、春季捕鯨と同様に捕獲した翌日に村人を対象とした祝宴が開催される。

一月の感謝祭と一二月のクリスマスマスの時には村全体で祝宴が開催されるが、その年の捕鯨に成功したキャプテンは教会に肉や脂皮、内臓などを提供する。

このようにバローのイヌピアットの一年は、捕鯨の準備や捕鯨、その後の祝宴によって特徴づけることができ、彼らの一年は捕鯨活動を中心として成り立って

いる。現時点においても、三〇〇人以上のハンターが捕鯨に参加し、獲物のクジラはさまざまな祝宴などを通して村全体へと分配される。捕鯨を実施することやクジラの肉を分かち合って食べることは、彼らの最大の関心事であり、アイデンティティの基盤となっている。クジラの肉や脂皮は、彼らにとって単なる食べ物ではなく、それ以上の文化的な価値を持つものである。

この捕鯨にも気候変動の影響があらわれるようになった。一九八〇年代には九月に海が凍結をはじめていたが、最近では一月ごろまで凍結しないようになってきたという。また、春の海水はきわめて不安定で、ハンターたちにとって危険度が高まった。とくに三月の海水の流れに大きな変化が見られはじめた。

一九八〇年代にはクジラは四月下旬から六月ごろにかけてバローの沖合い近くを東方へと移動し、九月下旬から一〇月上旬にかけて近海を西方へと移動していた。近年は、海水が海を覆う期間が短期化し、その面積も縮小化する傾向が見られる。クジラは呼吸をする哺乳類なので、北極海における生息条件は以前よりもよくなっている可能性が高いが、バローのハンターにとっては、回遊時期や回遊ルートの変化は、従来の捕鯨の実施

を困難にしつつある。たとえば、これまでもならば四月下旬にはバローから八キロメートルぐらい先にいくと開水域が広がっており、その海水原縁部でキャンプをしながらクジラの到来を待ち、捕鯨に従事した。しかし海水原や海水が少なくなったため、クジラはより広い範囲をどこでも移動できるようになった。さらに、春の海水原の融解が早くなり、二〇〇七年の春にはクジラを解体していた海水原が沖合いに流されるというアクシデントが発生したために、ハンター以外の村人が解体を助けるために海水原に出かけていくことが禁止された。また、二〇〇九年の春は例年にならない方向から風が吹き、開水域があまり形成されなかったことで、村全体で四頭しか捕獲することができなかった。村の長老たちは、このような変化は最近の温暖化の影響によるものだと考えている。

エネルギー危機と海底油田開発

第二次世界大戦中から海軍による北極海沿岸での油田開発調査が行われていた。そして海底油田開発を目的とした人工地震を利用した音波調査が一九七九年から一九八一年ごろにかけてバローやヌイツクサットの近海で実施され、それらが実

施された年には、音に敏感なクジラが回遊ルートを変えたらしく、その姿を見ることもなく、捕獲することが困難であったことが知られている。

最近の地球の温暖化は、北極海における海水原や海水の被覆期間と範囲を減少させた。これが石油・天然ガスの開発活動を容易にする条件となり、二一世紀に入りチュクチ海やポーフォート海での資源探索活動がさらに活発化し、クジラの回遊や狩猟活動に影響を及ぼしつつある。

二〇〇五年八月下旬に発生したハリケーン「カトリーナ」のためにアメリカ合衆国南部地域の海底油田が破壊され、石油の供給量が減少した。これが引き金となり、世界中の石油が不足した。アメリカ合衆国にとって石油資源を確保することは最重要課題のひとつになった。このような背景のもとブッシュ共和党政権（二〇〇一〜二〇〇九年）は、自国内での石油開発を検討し、開発の対象地域として候補にあがったのは、アラスカ北西沿岸地域の海底油田であった。これまで一年の大半を海水に覆われていたが、近年の地球温暖化の影響で凍結しない海域が出現したので、海底油田の開発が可能となったからである。

二〇〇八年よりバローに近いポーフォート海においてシェルら大企業によ

る海底油田探索調査が開始された。そして二〇一〇年の夏からバローに近いチュクチ海とカクトヴィイクに近いポーフォート海でシェルによって試掘が実施されることになった。この調査活動は、多数の調査船の航行や海底の掘削などともなうために、音に敏感なクジラの季節的な回遊や健康状態に影響を及ぼすのではないかと懸念されている。また、将来的に海底油田の掘削工事、油田施設の建設、船舶の定期的な航行などによってクジラの生態や回遊パターンにさらに甚大な影響を与え、イヌピアットの捕鯨活動に大きな影響を及ぼすと考えられる。さらに万が一、事故により石油が海中に流れ出すようなことがあれば、北極海全域の環境破壊をもたらし、クジラの生息環境や捕鯨活動に決定的な悪影響をもたらすことが予想される。

このように地球の温暖化は、国家の政策や企業の資源開発活動に影響を及ぼし、結果としてイヌピアットの捕鯨の存続に予期せぬ悪影響を生み出してしまっているのである。

捕鯨文化の将来

アラスカ北西地域の沿岸部に住むイヌピアットにとっては、現在でも、捕鯨と

クジラの肉や脂皮などを食べることは、彼らの生き方にかかわる最大の関心事である。しかし、この捕鯨は国際捕鯨委員会の管轄下で捕獲制限が実施され、また、多数の動物愛護団体や環境保護団体が反捕鯨活動を繰り広げている。これらの政治社会的な要因に加え、地球の気候変動による影響が出はじめている。このように考えると、現代のイヌピアットは、さまざまな悪条件のもとで、捕鯨を実施しているといえよう。

文化人類学者として私は、現在のイヌピアットの捕鯨文化を記録に残す調査に従事しているが、彼らの捕鯨の存続に微力ながら協力したいと考えている。



写真8 石油探査船に貨物を運ぶためのポート(2007年7月撮影)